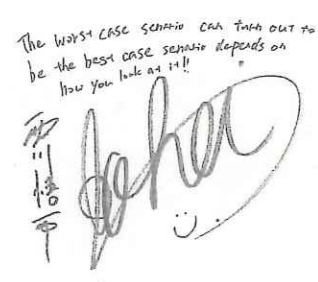


# 泥棒との約束 — 7本指のピアニストが伝えたいこと —

ニューヨークを活動の場としていた2016年、ある厳寒の夜更け、当時任んでいたマンシヨンの僕の部屋に突然、2人組の男が押し入って来ました。1人が僕に注射器のようなものを突き付け、その間に、もう1人が部屋の物をどんどん盗っていきます。



当然、僕は恐怖に凍り付きました。しかし一方、なぜか2人の生い立ちに興味がありました。どんな幼少期を過ごすと、人の物を盗るような人格が形成されるのか？。学生の頃、教師になりたいと思っていた時期があり、幼児心理学などを勉強していたことも興味をもった理由かもしれません。とても話し掛ける状況ではないことは分かっていたのですが、気付いたら「Excuse me! May I speak?」(話していいですか?)と口にしていました。もちろん、最初は相手にされません。僕はさらに「なぜ、あなたたちがこんなことをしなければならなかったのか、どんな子ども時代を過ごしたのか知りたかったです」と一氣に言葉を続けました。すると、男の1人が盗みの手を止め、僕を睨みながら「親父からは虐待され、母親は麻薬中毒。しまいには、2人とも俺を捨てて出て行き、俺はホームレスになった。お前に親に捨てられた痛みが分かるか?」と答えました。僕は何でも持っている「いいよ」と話し、さらに、おいしい緑茶を二人に淹れました。そこから、我々は次第に緊張が解けていきました。男の1人がその日、誕生日だったことを知った僕は、ピアノで「ハッピーバースデー」を弾きました。すると、彼は泣き出し、「自分の誕生日を祝ってもらったのは初めてだ」と喜んでくれました。明け方、彼らは結局何も盗らないどころか、調子の悪かった浴室の暖房器まで直してく

## ずいそう

れて立ち去りました。「鍵は掛けとけよ」という置き台詞とともに— これは実話です。そして、立ち去る前に、僕は彼らと2つの約束を交わしました。1つ目は、警察に通報しない。その代わり仕事を見つけてほしい。2つ目は、僕がいつかカーネギーホールの大ホールで演奏する日が来たら、必ずあなたたちをVIPとして招待する。同時に1通のメールが届きました。「俺たちは招待されるのかい?」なんと、彼らがコンサートの広告を見つけて連絡してきたのです。約束したものの、僕は正直、怖くなりプロデューサーに相談すると、「ゴヘイ、相手は誰であろうと、約束は守るべきだ。最高の席を用意する。」こうして、あの泥棒2人がスーツ姿で、本場にコンサートにやって来たのです。終了後、「本当にありがとう」と長文のメールが届きました。これには、僕も心から感激しました。その後、彼らは清掃業で成功し立派な車を買ったことなど、連絡を取り合う仲となりました。

僕は、いわゆる正統派のピアニストではありません。15歳でピアノを始め、20代の半ばでニューヨークのリンカーンセンターでデビューを飾るなどキャリアを積む中、突然、局所性ジストニアという病気がかかり、なぜかピアノを弾くときだけ、ほとんどの指が硬直して動かなくなる障害を負いました。診断した医師全員から「もう一生、プロとしてピアノは弾けない」と断言され、一時は自ら命を絶とうと思いつめるまで到底を味わいました。しかし、転機は訪れます。アメリカ人の友人に誘われ、気分転換に訪れた幼稚園で、子どもたちにお願ひされ、ほとんど動かぬ指で「いやいや何とかな」「キラキラ星」を弾くと、子どもたちは大喜び。「指使いなんか関係ない。子どもたちは純粋に音楽を楽しんでくれる。子どもたちは大喜び。」指使いなんか関係ない。子どもたちは純粋に音楽を楽しんでくれる。

ならば、動かせる指で弾けばいいんだ。僕は、懸命にリハビリに励み、心を支えてくれた大阪の両親やニューヨークの様々な人との出会いもあり、「7本指のピアニスト」として再び音楽の道を歩むようになりました。そして、2020東京パラリンクピック閉会式では、2億500万人が視聴する中、グランドフィナーレを演奏させていただきました。

僕は今、通常のコンサート活動とともに、国内の小・中・高・大学、時には養護施設などを訪問し、子どもや若者たちにピアノ演奏とお話を届けています。15歳でピアノを始め、どうやって音大に現役合格できたかなど具体的なこと、チャンスのつかみ方、怖くなつて逃げ出したときや弱気になったときの乗り越え方、しんどい思いをしている子がいたら、「普通の人を経験しないような思いを、今しているんだから、後は絶対楽しいよ」と。自分のこれまでの経験から、伝えたいことがたくさんあるのです。

犯罪をした人の更生を手助けするって素晴らしいことだと思います。僕もニューヨークで泥棒などに遭いましたが、元から悪い人はいなかったように思います。でも、日本だと一度つまずくとその人を叩き潰すような風潮がありますよね。アメリカでは、失敗してもセカンドチャンス、サードチャンスが必ずあります。刑務所出所者でも更生していい仕事をすれば、英雄になれるのです。だから、日本には保護司さんのような方がいらっしやうて大正解だと思います。それと似た発想をアメリカの生活で感じてきました。

これからも7本の指で、一音一音を心を込めて、少しでも聴く人の心の癒しになればと思ひながら、ピアノに向き合っていきます。

(西川悟平・ピアニスト)